日本分析化学会のこれから

二　瓶　好　正

近年，社会も大学も学会も世の中全体が今までになく忙しくなったように感じている。例えば，企業においては，高度成長から安定成長への経済的転換と国際的競争の激化に直面して，従来の組織，経営方針，活動の基本構造が大きく変更を迫られているようである。また，行政においても，経済社会と同様な理由による状況変化と，さらに国民の意識の変化に基づく政治的な圧力を受け，行政担当者の意識と制度的枠組の変更を迫られている。大学においては如何（いかが）であろうか。皆様良くご存知のとおり，国立大学の独立行政法人化の流れの中で，大学の行政組織化，世俗化，効率化に向かって大きな変化が起ころうとしている。

1　公益法人の見直し

上記のような変革の流れの影響は，学会の在り方にまで及んでいる。その直接的影響の一つは，公益法人に関する制度の見直し論である。従来の公益法人は，民法において「祭祀，宗教，慈善，学術，技芸其他公益ニ関スル社団又ハ財団ニシテ営利ヲ目的トセサルモノ」は主務官庁の許可を得てこれを法人とすることができるとされている。すなわち，文化，学術等は公益の最たるものとして，今までの行政ではその位置づけについて，なんら問題とされてこなかった。ところが近年，公益法人及びこれを所管する官庁に対する批判が非常な高まりを見せ，公益法人の運営にかかわる問題，公益法人と行政との関係にかかわる問題など，様々な指摘がなされた。具体的には，休眠法人・所管不明法人の整理，行政委託型公益法人等の改革，つまり中央官庁の許認可権限とお役人の天下りとの関係の解消を目指した改革等が指摘された。

このような動きは，一部の公益法人の不適切な運営に関する是正措置と見られるが，基本となる民法が100年以上も改正されていないため，公益法人の抜本的見直しが必要との流れとなり，また公益法人と優遇税制との関連が強く意識されることとなっている。すなわち，従来の公益法人を大幅に削減し，「公益」にかなう法人を再指定しようとする動きが出てきた。

このような議論になると，そもそも公益とは何かが問われることになる。民法には「公益」の定義は明示されていないが，文脈から推測すると「不特定多数の利益に積極的に貢献すること」と理解される。上記の再指定につき関係者の発言をまとめると，従来の特定公益増進法人相当に絞り込まれる可能性がある。ところで特定公益増進法人とは，公益法人のうち，公益の増進に著しく寄与するもので，運営組織及び経理が適性であるなど一定の要件を満たす法人につき主務大臣から認定を受けた法人を意味する。

以上の情勢から判断すると，現在の学会が公益法人として今後も存続するためには，かなりの頭の切り替えが要求されることになる。例えば，会員の相互の交流，会員の研究発表のため，会員の利益のため，という今までの学会運営の価値基準に加えて，社会の要請に応じて不特定多数の一般市民のために社会貢献するなど，新しい公益基準が問われることとなる。

2　学会の社会的役割の拡大

一方，学会の社会的な役割は拡大の一途をたどっている。最近の顕著な例は，技術者教育，社会人教育，社会人継続教育等における学会の役割の増大である。また，第2期科学技術基本計画においても，学会活動への大きな期待が述べられている。すなわち，学会の知的基盤形成への役割の増大である。さらに，国の標準化行政の抜本的改革に伴って，この分野におけるコミットメントの増大も期待されている。また，やや異色な活動としては，女性の社会進出を推進するための活動として学会連合が共同して講演会を行う等の活動例もある。

本会では，上記のような役割については従来からすでに種々の項目において社会貢献を行ってきた実績がある。本会が行う人材育成に関する事業は，必ずしも会員のみを対象とせず，広く多くの受講者に対して機会を与えている。また，種々の社会的な要請に対して応える努力を惜しまなかった。例えば，分析結果の信頼性の向上に必須の認証標準試料の調製と頒布，試験所認定制度への貢献，分析技術者の技能向上を目指した認定試験の実施等である。また，最近多くの大学において強い関心を巻き起こしている技術者教育認定制度への協力，技術者継続教育制度の確立への協力も大切な公益事業である。

これからの学会は，社会との交流においてより広く開かれ，より直接的に社会貢献し，社会とともに歩む学会となるべきである。つまり，従来のように狭い意味での会員のためでなく，会員の活動の成果を広く社会に知らせることにより社会に直接呼びかけ，また社会の要請に対して目に見える形で責任を果たす等，広い意味での会員のための役割を果たさなければならない。

3　日本分析化学会のこれからの方向

以上のような現状認識から出発すると，本会のこれからの方向はどのように考えればよいであろうか。もちろん，理事会，各支部，代議員，事務局の皆様のご意見を広く御聞かせいただきたいところである。おそらく，比較的短期間に実行すべきもの，時間をかけて検討すべきこと，将来ビジョンとして何代かの会長任期の間に実行に移すべきこと等，多くの検討事項が顕在化することと思われる。

私見ではあるが，会員の皆様と共に考えて行きたいことを順不同で列挙する。

1. 分析化学における学術貢献，社会貢献，国際貢献をいかに高めるか。
2. 分析化学と分析技術における人材育成をいかに充実させるか。
3. 科学技術全般の土俵の上で，分析化学の存在意義と存在感をいかに高めるか。
4. 科学技術振興の牽引（けんいん）車として，新しい分析機器および方法論をいかに早く開発できるか。

次世代の会員のために今成すべきことを見据（みす）えて，可能な限り努力をしたいと考えているので，会員の皆様の御理解と御協力を心からお願いする次第である。